

魔女と王様

とつても小さな九つの国——3

あわなみりようさく

52 山々の向こうに

「行けー、勇しき兵士たちよ。この世界に人間の自由を取り戻すのだ！」
猛々しい表情を浮かべたニーダマの左右では、神妙な顔つきのピーテルとエリユーが無言でたづなを握りしめています。

一隊が大蛇のいたあたりにさしかかると、ニーダマが右手を上げて騎馬を止まらせました。

「しかし、相手は魔女王、魔女の王なのだ。どこかに立派な城があるにちがいない。城だけではないぞ、家来の魔女どもだって、村を作って暮らしているのだろう。ピーテル、エリユーよ」

ニーダマの呼びかけにはつとして、ピーテルとエリユーが馬を寄せます。

「は、王様」

「何でしょう、王様」

「お前たち二人は十人ずつを連れて、それぞれあの山とあの山の向こう側を見てまいれ。魔女が暮らす村があるのなら、どこかに魔女王の城があるなら、それを示すものが見つかるはずだ」

「はい、すぐに行つてまいります」

二人が同時に言いました。

でもみなさんは、おやおや……って思っていないませんか？ 魔女は簡単に家の姿を隠すことができるのです。別のものに見せることだって造作もないこと。そう、北の森にあったローズンの屋敷もそうでしたものね。

ニーダマは、二十二人が去つて行ったのを満足げに見送りながら、新たに二人の家来を呼び寄せました。そして、また別の山を指さして言います。

「お前たち二人は、あの山とあの山だ。十人ずつを連れて行け」

そうやってまた二十二人が去ると、また次の二十二人を、そしてまた次の二十二人を行かせました。

そうしてとうとう王様の元にはわずか十四人が残るばかりとなりました。まだ、ピーテルもエリユーも、誰も帰っては来ません。

それはそうです。だって、王様に遣わされた兵士や家来の誰ひとりとして、まだ目的の山にたどり着いてはいないのですから。

え？ それはどうしてか、ですって？

そうそう、そうなのです。魔女たちはとつくに、ニーダマたちのことに気がついていたので。兵士たちが近づくにつれて山はどんどん遠ざかり、決して誰も、山の向こう側には行けなかったのです！

「私たちは、どの山の向こうを探せばよいでしょう？」

残った兵士の一人が聞きました。でも、ここでみんなに行かれてしまつたら、ニーダマの元には誰も残りません。ニーダマは考えたあげく、一言だけ発しました。

「待つ……」

そしてニーダマは馬を降りました。兵士たちがニーダマにならつて馬を降りたその時です。すぐ近くの山から、真つ赤な炎の雨が降ってきたのです。

〈つづく〉